

【本文】

如来の諸智しよちを疑惑ぎわくして

信ぜずながらなほもまた

罪福ざいふくふかく信ぜしめ

善ぜん本修ほんしゆじゆう 習じゆうすぐれたり

【意訳】

阿弥陀様の様々なお智慧を抛り所にせず、

自分を抛り所にしたその上に、

罪深い自分はきつと仏に成れないと頭を抱え、或いは善を積み重ねた自分はきつと仏に成れると自己流の理解に終始して、

阿弥陀様流ではなく自己流でお念仏を励む人がおられます。

【私の味わい】

「おごるよと言ったら家族連れで来た」（毎日新聞令和五年十二月十九日付川柳）。想像するに会社の同僚なり、友人なりが個人的に一对一で親交を深めたくて「おごるよ」という善意のお誘いをしたのでしよう。すると、その相手は善意をかなり自分に寄せて捉えたようで、子供を含めて家族皆でやって来て面食らった、という句なのだと思像します。

常識的にはこんなことしないよね、という言い方もできると思いますが、存外人ごとのようには言い切れない部分もあるのではないのでしょうか。この相手方の問題は、誘ってくれた当人の意向をきちんと汲くまずに、自己流に判断したことにあります。

阿弥陀様は、人の考えや思いが及ばない程の深遠なお智慧を背景に、私達に最上の善、救いの恵みをお与えになります。一方、その善の内容をよく聞かずに、自己流に解釈して内容がよくわからないままに手を合わせてお念仏する、これは誰にでもあり得ることではないでしょうか。だからこそ、親鸞聖人は上記のご和讃で阿弥陀様のご意向をきちんと聞かず、自己流に終始する危うさを指摘しておられるのでしよう。

私達、お念仏のご縁があつた仏教徒が、為すべきことはいつも同じです。

阿弥陀様を抛り所にする法話を聞く

阿弥陀様を抛り所にしたお念仏をする

今年も一年、この同じ営みを大切にさせていただきます。

（悠水）